

ONE LOVE 通信 61号

2017年8月27日発行

最近、世界のあちこちで自然災害による被害が出ています。私が子供の頃、30℃になるとそれだけでもう「夏！」と思っていたのですが、この頃は30℃など序の口のようなのです。

日本でも大雨で人が亡くなったり、地震の爪痕と未だに戦っている人がたくさんいます。どうぞ被害に遭われた皆さま、一日も早い心と体、そして住んでいらっしゃる場所の復興が進みますように。何よりも再び災害に遭われませんように。ルワンダから無力ではありますが、応援のエールを送りたいと思います。がんばれ〜!



【では、虐殺後のルワンダはいかに変わったか？】

前号でワンラブ・プロジェクトの20年の歩みを紹介しました。ではルワンダはその間、どのような変化をたどってきたのでしょうか？

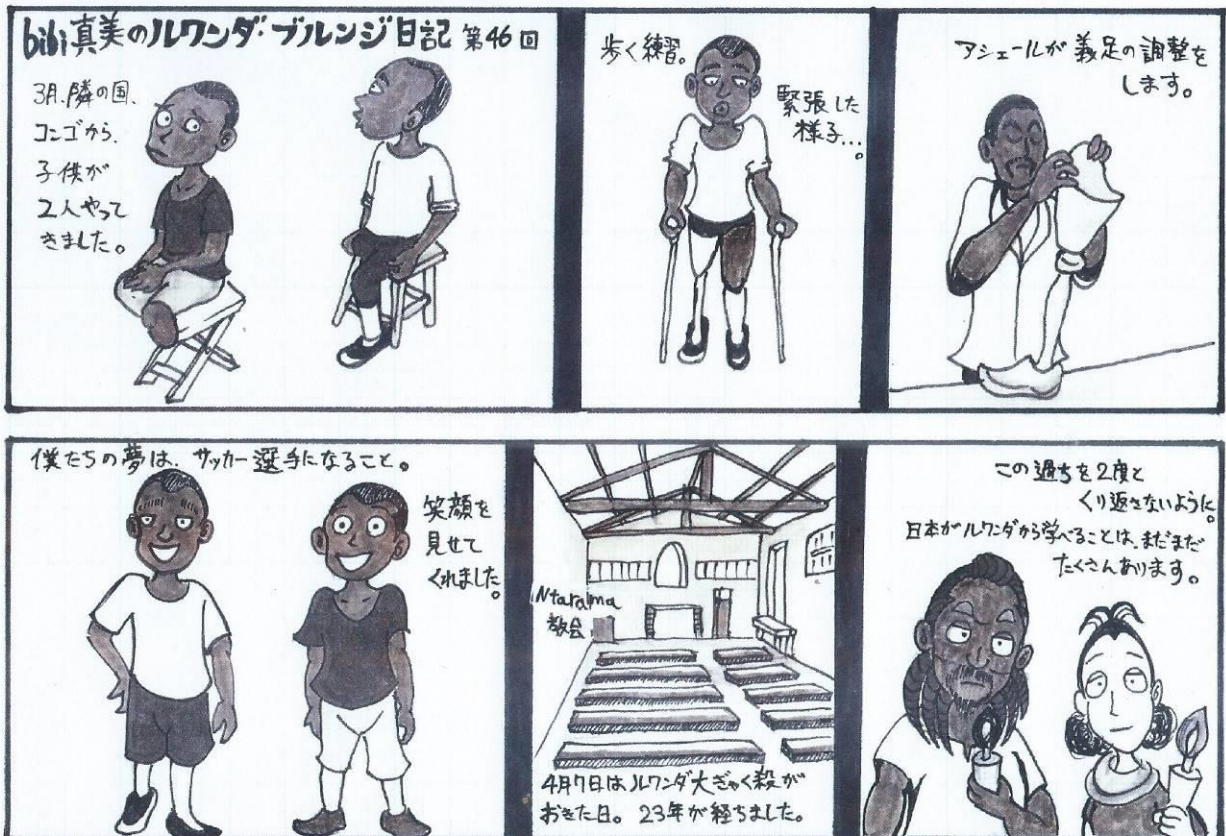
いや〜、めちゃくちゃ発展しました。勢いについていきません。私も50代に突入し、新しいものを受け入れづらい年齢になってきたからかもしれませんが、それにしても最近のルワンダは、わからないことだらけになっています。

携帯電話を持つ人が減りました。スマホなのですね。若い人だけでなく、ある程度年齢のいった人も使っている。携帯が出回り始めたころは、値段も高かったけれど、人気なくなった今、安いものは1,500円くらいで買えます。スマホは安いものでもその10倍くらいします。ワンラブのスタッフもスマホを持っている人がたくさんいます。が、ガテラも私も普通の携帯。彼らの給料でよくスマホを買ったなというのが本当の気持ちです。基本的に彼らは新し物好きです。スマホの普及で、確かに通信事情や日常生活は良くなりました。でも日本と同じように、人と一緒にいる

の到下を向いてスマホをいじっている光景を見かけるようになりました。つまり人と人との会話が減ったということですね。アフリカの良いところは、顔と言葉と体を使ってコミュニケーションしていたことにあると思っています。スマホをいじっている光景を受け入れられません。ここにひたすら私がスマホを拒む理由があります。

思えばルワンダとかかわりを持つようになって（つまりガテラと知り合ってから）、最初の通信手段は手紙でした。方や日本にいる私。そして紛争を逃れてケニアに滞在していたガテラに意思を伝えるために使った手段は文通でした。思いを込めて書いた手紙が届かなかったことも何度もあります。そしていつ届くかわからない手紙を待って覗いたポスト。それはそれで良い時代だったと思っています。

ルワンダに住み始めて、やっと手に入れた固定電話。手続きをしてから1年かかりました。でも固定電話には電話線が必要。そしてそれがいつも盗まれる（電話のケーブルは良い値段で売れるから）。盗まれると自分たちでケーブルを買いなおして工事をする。盗まれては直して…、いたち



ごっこが続きました。そんなことをしているうちに携帯が普及し、今はスマホ。インターネットも普通に使えます。スピードもアップしたので動画を見ることも問題なしです。が、携帯電話やスマホの普及とともに失ったものは、人と人との会話でした。とても残念なことです。でも多分この先、さらに人と人の会話は減っていくと思われます。

買い物も便利になりました。以前はキガリ市の真ん中に青空市場がありました。私は買い物かごを下げて、毎日そこに通っていました。

野菜も肉も魚も日用雑貨も、生きた鶏も何でもありの市場だったので、いろいろなにおいが混ざっています。冷蔵庫もないそこでは、平台の上で今しがた屠殺されましたと思しき牛がたたき切られ、その回りをハエが飛び交っています。多くの日本人はその光景に腰が引けます。



青空市場ではこんなふうにとれたての野菜や果物が山積みになっています。この辺は問題ないけど、肉や魚、生きた鶏売り場は、日本のスーパーに慣れている人にとっては、ちょっと腰が引ける…。

人が多く集まる場所の常、そういうところにはスリや、虐殺によって家族を失い自分の力で生き延びなくてはいけない子供たちが集まっていました。彼らは買い物客の隙を狙って財布や買ったものを盗んだりします。私も時々荷物をすられました。あの頃、紅茶に入れる粉のミルク（いわゆるクリーム）は高価でした。だから少しでも安い量り売りの粉ミルクを買っていました。それが忽然と買い物かごから消えているのを見つけた時は、ガテラの前で悔しさに号泣しました。

そんな市場も街の景観を悪くすること、そしてスリなどの犯罪が増えるなどの理由で閉鎖され、今はビルが建てられ間屋街のような様相になっています。

あれから長い時間が過ぎ、町の中からストリートチルドレンが劇的に減りました。もちろん虐殺から23年が経ち、子供だったストリートチルドレンがすっかり大人になったということもあるかもしれませんが。でもその後ストリートチルドレンとして生きなくてはいけない少年少女が減ったことは確かな事実だと思います。これはルワンダが平和になってきたということの象徴でもあるでしょう。しかし人の物を盗み生きながらえてきた子供はもう青年。果たして彼らがどんな人生を送っているのか、気になります。

ところで青空市場、すべてなくなったわけではありません。郊外には相変わらずあらゆるものが手に入る市場があります。ここは昔のままの混とんとした風景。但し私の気力が減ったため、もう青空市場はあまり利用しません。なぜならば毎回値段の交渉をするのがかったるいからです。何度足を運んでも私は外国人値段を言われ（つまり高い値段）、その都度まけるまけないの交渉をする気力が失せたからです。その代り増えてきたスーパーマーケットで、きち

んと値段が付けられているものを買うようになり、値段交渉の労力を減らすことができました。これは楽だよ。しかしスーパーで買うようになって失ったのは野菜の鮮度。市場はその日採れたものを並べるので、何といたっても新鮮です。朝もやの中、自分のところで採れた野菜類を市場に並べます。が、スーパーはどうしても商品の回転が遅いし、冷蔵庫で保管されたものを並べたりするから、しなびたものも平気で売られちゃったりしています。

市場とスーパー、それぞれ利点があり、その時の懐具合や気力・体力で使い分けるのがいいかもしれません。

人々の装い。20年前はアフリカ独特の派手な布で作ったドレスを来ている人が目立ちました。でも今は洋服が主流。また破れたり、穴の開いている質素なものを着ている人も減りました。それから靴。街の中心でも靴やサンダルを履いていない人もいましたが、今はほとんど見かけません。それだけ人々の生活が豊かになったということでしょう。

景観も変わりました。昔は町の中はほとんど平屋、もしくは2階建てでしたが、今はビルもどんどん建てられていますし、ショッピングセンターもあります。そこではファストフードを楽しむ人たちも見かけられます。そして以前は町近郊で牛を連れて歩く人がいましたが、今はそんなことしたら多分お咎めを受けます。

郊外の景色も変わっていています。あの頃、大した家もなく、その辺の畑で自分が育てた野菜を細々と道端で売っていたようなな～んにもなかった土地が、今は高級住宅街に代わっています。日本では豪邸と呼ばれるような家がたくさん建てられました。当時ワンブランドを建設中に、現場監督がこんな話を持ってきました。「俺さ、郊外の〇〇地域に家が2軒くらい建てられる土地を持っているんだけど、買わない？」さらに詳しく聞いてみると、確かに十分な広さがあり、その土地を20万円ほどの価格で売りたいらしい（安い！！）。でもその場所、町の中心から車でわずかなところにあるものの、道路も舗装されていないし、あたりにな～んにもなかったのが買うのをやめたのです。



な～んにもなかったところに、こんなモダンな建物ができてしまった。これは会議場。夜になるとルワンダの国旗の色、青・黄・緑にライトアップされる!!

でも今そこには大使公邸やらおしゃれなレストランが建ち並んでいます。こんなことなら買っておくんだっ！ワンブランドで2度洪水に遭い、その修理にかかった費用を考えたら、この土地を買って建物を建てた方がよっぽど安く上がっていたのであります。あ～悔しい！！

そしてある面でルワンダは非常に発展しているものの、一向に改善されないもの。それはサービスと責任感の欠如があります。これは結構ムツとします。輸血用の血液を輸送するのにドローンを使ったり、インターネットを使って

税金が申告できたり、Suica やPASMO のようなものを使ってバスを利用したりと、技術の面ではその辺のアフリカ諸国より進んでいるものの、肝心なそれを扱う人間が今一つ育っていないのです。レストランでもオフィスでも、客が来ているのに平気でおしゃべりしていたり、さらには接客中にも関わらず、かかってきたプライベートな電話で延々と話をしたり…。そして技術で勝負しようとしている割には、故障も頻発し、メンテナンスがすぐになされず、仕事が停滞するという。これは例えば悪いかもかもしれませんが、水洗トイレで水が流れない。そして悲しいかな、トイレのドアを開けた時に、前の人が用を足したそのままの状態を目にするようなものです。水洗トイレで水が流れないのであれば、いっそのこと田舎の穴だけ掘ったようなトイレの方が余程納得がいくのです。「水洗」ということで、私たちは流れることを期待しますからね。が、残念ながら今のルワンダは質を求める割には、人をもてなすとか、それを扱う人材の育成とか、メンテナンスの充実ということに欠けているのです。そして仕事をするにあたってのプロ意識と責任感が薄いです。そのくせ高等教育を受けた人はいたずらにプライドだけは高い。だから一緒に仕事、しづらいです…。そんなことを体感していると人材という意味では、正直なところ発展途上だと思うのです。ルワンダでは形から入って、中身が今一つという場面に頻繁に出くわすのであります。

まあ、ルワンダはかなりそんなふうはこの20年間、がんばりつつ変わっていったのですよ。そして私は高級住宅街になっていったその地域を通るたびに、先見の明があったならばと後悔するのであります。



ルワンダ事務所代表ガテラより

【素直に育ってほしい。】

俺は子供に好かれる。そして俺も子供が好きだ。

俺はどこにいても子供に寄ってこられる。この間、親戚を家に送ったとき、子供たちが集まってきた。そして俺の履いている装具を見て「うわ〜、こんなにデカイ靴を見たのは初めてだ!」と言った。

皆さんご存知のように、俺は足に障害があるので装具を履いている。装具の靴の部分、足の長さを調整するために補高がされている。その高さ約7センチ。だからそっちの足だけ妙に大きく見えるのだ。

それを見て子供はびっくり。そりゃそうです。両足のバランスが極端に違うからね。そのびっくりをそのまま表現する。しかもそのガキどもは「まるで象の足のようだ」とも言うではないか! わはははは! 全くその通りなのである。うまい表現をするではないか!

またある時は俺の運転する車の中を覗いて「なんだ、あのブレーキ。鉄筋で作った安物じゃないか」と言った。足が不自由だから、俺は足でブレーキを操作することができない。だから建築資材の鉄筋を使って、足でなく手でブレーキが

【外務大臣表彰されました!】

ワンラブの活動、今年度の外務大臣表彰を受けました! いや〜、紆余曲折20年、つらいことだらけの日々でしたが、ありがたい賞をいただくことができました。

ある日突然にルワンダ日本大使館の方からメール。「話したいことがあるので、都合をつけてください」と。これを見て、まず思ったのは「むむっ! また私は何かヘマを犯したか?何かお咎めを受けるのか?」ということでありました。いや、実際過去そういうお咎めを受けたことはないのですよ。ただどうにも劣等感を抱えながら生きていると、こういうマイナスの方向に物事を考えてしまうのですね。

で、連絡をしてみるとこのお知らせだった…。まったくもって青天の霹靂である。

ありがたいことにワンラブの活動は過去何度か賞を受けただけです。しかし「国」から賞をいただくのは初めてであり、本当に私たちの活動がこんなものをもらっちゃっても良いのだろうか?という思いは否定できません。

しかしいただけるのであれば、なんでもいただいておこうという気持ちの方が強いので、今回のこの賞もありがたうお受けしました。

しかしワンラブの活動が賞をいただけるということは、ひとえに皆さまのお力添えがあったからこそ。日々自転車操業で危なっかしい運営を続けておりますが、いつも誰かが支えてくれました。この場を借りて、改めて皆さまにお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

ワンラブはこれからも私たちのわがままを含めながら活動を続けていきますが、等身大でありたいこと、本音でやり続けたいこと、その基本的な思いは変わりません。どうか引き続き見守っていただけましたら幸いです。

けられるように工夫をしているのだ。見た目はただの鉄の棒である。それを見て、子供はちやちな安物というのである。

こんなふうには子供は目にしたものを、ストレートに表現する。そしてその驚きも隠さない。相手が気分を害するとか、そんなことお構いなしだ。

そんな彼らを見ていると、その素直さに感心する。大人はどうしても物事をオブラートに包んだように話したり、表現するからだ。

子供たちは珍しいもの、初めて見ることにとても好奇心を示す。時々日本の学校で「なぜ足が不自由なの?」と聞かれる。そうすると俺はズボンをめくって、自分の履いている装具を見せる。子供たちは何だ何だと前に集まってくる。そして初めて見る装具に対して「ロボットみたい」と表現する。一方大人は見てはいけないと思うのか、サラッと見るだけで目をそらす。ここに問題があるのである。俺は子供がするように好奇心丸出しで見てもらった方が、ズボンのめくり甲斐があるのだ。

知らないことがあるのは当たり前で、それを知ろうとする子供たちを俺は支持する。好奇心いっぱいの子供たちが、知らないことをどんどん学び、大人になり、同じように子供たちに自分たちの得た知識を伝えてほしいと願うのである。

【カガメ大統領再任！】

8月ルワンダでは大統領選挙がありました。カガメ氏の3選となりました。大多数の人が予想した通りの結果です。

通信でも何度も書いておりますが、ワンラブの歴史は、ルワンダの大虐殺後の歩みとほぼ一致するため、私はどうしてもカガメ氏ビイキです。ルワンダを復興させるために流した汗の量が想像できるからです。カガメ氏の汗の量と、自分たちの汗の量を比べちゃうのです。そして大変だったろうなあ…と思わずにはいられないのです。

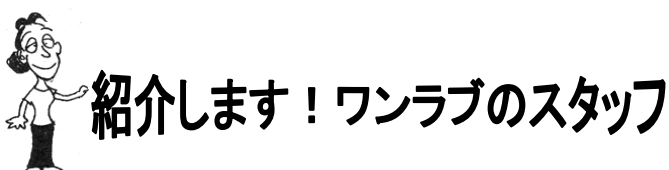
ただ2000年からずっと大統領の座についているので、反発の声も上がっています。独裁的だと。確かに一人の人間が17年にわたって国を治めるというのは微妙なところがあるかもしれませんが。実際政策に反発する人々を闇に葬るといったことも起こっているようです。しかしこの間にルワンダに起こった奇跡的な発展に目をつぶることもできないかと思えます。通信の最初に書いた通り、ルワンダは大きく発展してきました。これは確かなリーダーシップがあったから起こり得たことだと感じます。もしもアフリカにありがちな、自分の懐を肥やすためにトップの座に就くような人であったら、汚職は蔓延し、国は発展しなかったでしょう。

カガメ氏はスピーチでいつも「う〜ん、確かに…」と思わせることを言います。しかも彼はルワンダ語でするスピーチの時はほとんど原稿に目を落としていません。アドリブなのです。つまり頭の中に言いたいことがしっかり入っているということですね。

虐殺23年目のスピーチの時、ガテラとカガメさんが同じことを言ったのでびっくりしました。それは「大虐殺に関与した殺人者の子供だからと言って、その子が殺人者であるわけではない」という言葉です。虐殺を知らない子供に罪はない。ひいてはその子供たちがルワンダを作っていくということを言わんとしたスピーチでした。本当にその通りです。彼らに正しく事実を教えたら、正しくルワンダを作っていくことなのでしょう。

これから7年、もしかしたらさらに7年、彼の政権は続くかもしれません。でも国民のことを考えずに、自分のわがままを強硬に通そうとしているどこかの国の首相よりは、真摯に自分の国に向かい合っていると思います。

カガメさんの顎ひげにも白いものが混じるようになってきました。そしてそれを見ながら、相変わらず自分たちは彼と一緒に体力の衰えを感じながら、それでもまあ、前に進みたいという思いを持って、何とか日々を過ごしていくんだろうなあと思うのであります。



紹介します！ワンラブのスタッフ

【その1、研修員編】

今年もまた神奈川県海外研修員受け入れ制度に、ワンラブの義肢装具士見習いが選ばれました。ついに10人目です！名前はデオ。とても小柄な31歳独身男性です。

デオはワンラブで義肢装具の勉強を始めて2年が経ちました。ガテラがいつの間にか連れてきて、気がついたらそこにいました。私は彼がはしゃいでいる姿を見たことはありません。面白いのか面白くないのか、いつもむっつりしています。果たしてこれは私の前だけでしょうか？他の人の前ではおちゃらけた態度もとるのでしょ



私が秘かに凸凹コンビと呼んでいるアシエール(左)とデオ。こんなに身長差があるのだ。

彼の7つ年上のお姉さんは、カトリックの教会の修道女です。彼と知り合うきっかけはこのお姉さんでした。お姉さんは生活に困っている人や、障害を持つ人たちの暮らす施設で奉仕をしています。そこでたくさんの障害者が義足や杖が必要だということを知り、ワンラブの存在を見つけ、障害者たちを連れてやってきたのです。だからデオもクリスチャンです。でも熱心ではないそうです。日曜日に教会に行ってお祈りをしたり…、そういうことはあまりしないそうです。でもいつもお姉さんの献身的な姿を見て、自分も人のために何かできればと思って、義足を作る勉強を始めたそうです。

日本に行くのはもちろん初めて。ビザを取るために在ルワンダ日本大使館に行った時、そこに置いてあった冊子の中に伊勢海老の写真を見つけました。おもむろに「これは何？」と。見たこともなかったようです。日本人はこれを食べるのだと言ったら、無言でうつむいていました。かなりショックだったようです。だから日本の食材に慣れるかどうか、ちょっと心配です。

今年は海に近い横須賀の義肢製作所での研修となります。研修に疲れたら海を散歩するのもいいかもしれません。そう、彼は海に触れるのも初めてです。大きな水の塊を見て、どんなふうを感じるのでしょうか？

さてこれから7か月、無事に日本で生活できるかな？皆さま、応援してくださいね。

【その2、再びアリーネ編】

前号でワンラブのレストランを中心になって動かしているアリーネという女性のことを紹介しました。その後の様子を再び。

3月に赤ちゃんを産み、3か月ほど産休を取っていましたが、仕事に復帰しました。またレストランの切り盛りです。しかし復帰するにあたり、彼女が快適に子育てをしつつ働けるように、準備を整えました。

まず乳飲み子を抱えての仕事に配慮し、レストランのカウンターのわきに小さな部屋を作りました。そこにベビーベッドを置き、赤ちゃんが寝ている間はそこで寝かせ、また授乳ができるようにしました。ルワンダの女性は赤ちゃん

んが生まれると、割と平気で人前で授乳をします。日本ではあまり見かけない光景となってしまったので、その姿を見た時私はブラボー！と思いました。ある時私は日本から来た男性を連れて、ガテラの親戚のところに行きました。この間赤ちゃんを産んだその親戚の女性はちょうど授乳の時間。その女性はおもむろにぼろっとおっぱいを出して授乳を始めます。それを見てうろたえたのが日本人男性。傍で見ていて「どうした、しっかりしろ！」と言いたくなるくらい、おっぱいを目の前にしてうろたえていました。そしてその顔は真っ赤を通り越してグミ色になっています。おっぱいを人前であげる状態を見慣れてしまった私は、本来自然である授乳という行為を意識して見つめる男性を見てついいやらしい！と思ってしまったのであります。まあ、しかしやはり人前でど〜んとおっぱいを出すのは抵抗がある人もいましょう。だからアリーネのために授乳室を用意したわけですね。

そしてレストランは外のスペース以外禁煙にしました。あちこちに禁煙マークを貼りまくります。レストランではお酒も出すので、パーティなどがあるとカウンターの回りにタバコを吸いながら集まってくる人たちもいます。赤ちゃんにタバコの煙なんてもってのほか！ちょっとでも煙の気配がすると、飛んで行って「禁煙！」と叫びます。



アリーネの記事だが、ガテラの写真を。レストランでアリーネの赤ちゃんあやし中。こんにちは、赤ちゃん。私カリアは、…では困るのである…。

こんなふうに環境を整えたわけですが、この2点を言い出したのはガテラだったのです。できるだけ安定した状態で子育てができるよう、彼なりの配慮ですね。そして恥ずかしいことですが、私は一切そういう配慮が浮かなくてこなかった。子供を育てたことがないと言ってしまうまでも、そういう発想が出てこないのです。もともと私は子供が苦手で、自分から赤ちゃんを抱きたいと思ったことがありません。子供をあやすこともできません。そんな私のことを知ってか知らぬか、ガテラが正しいお父さんの姿を示してくれました。

そんなわけでアリーネは今、赤ちゃんをおんぶしながら仕事をしています。夜も遅くまでがんばっています。赤ちゃんが病気になる、ガテラが慌てて二人を病院に連れていきます。ガテラもレストランが終わるまではお店にいるので、もしかしたらアリーネと一緒にいる時間の方が長いかもしれません。だからきっと赤ちゃんは自分のお父さんはガテラだと思っていることでしょう。となると、私っていったいなに？まあいいか。

【ちょっと最近へこんでいた】

私、自分ではそれなりに根性はあると思っています。だ

から巨人の星が大好きでした。スポ根やら怒られてもしごかれても俺は負けない！と這い上がっていくような漫画をよく読んでいました。だから人にもそういうことを期待してしまうのかもしれませんが。でもここしばらくへこんでいました。その理由をここに書かせてください。

ありがたいことに、ワンラブには時々ボランティアをしたいとか、なんらかの理由で一緒に働くことになる人が現れます。しかもルワンダで。いろいろな雑務に対応するには、補佐がいてくれると助かります。だからのどから手が出るほど欲しいのです。でもストレスにつながることも出てきてしまうのです。もちろんありがたい存在の人もいます。でもこの人はいったいルワンダまで何をしに来たのだろう？と思ってしまう人もいるのです。

私が一番「これをやられたら困る」というのは、ワンラブのスタッフと男女関係になり、それ故仕事がおろそかになる、あるいはワンラブのスタッフに悪影響を与える存在になるということです。

基本的に私は人の恋愛に口を出す気はありません。彼らが自分たちですべて責任を取って恋愛をするのであれば、何も言いません。

でも中途半端なケースも多いです。好きなのか嫌いなのか、その人と前を一緒に見つめたいのか？それとも一時的に開放的になった故のことなのか…。恋愛関係になり、手伝ってくれていたことをおろそかにしたり、朝帰りするようになったりすると、ボランティアといえども私は注意をするしかありません。そしてさらに悪いケースは、スタッフに勘違いをさせてしまうということです。私の表現に不快感を示す人もいるかもしれませんが、流れとしてはこんな感じです。ルワンダの人たち、日本人や外国人と仲良くなることを一つのチャンスだと思っている人も少なからずいます。それはつまりルワンダから逃げ出せる、海外で暮らせるようになるかもしれない、お金がいっぱい手に入るかもしれないなどと言う様々な理由によって。そしてあるスタッフは自分の待遇に不満を持ち始めます。例えば一つのケース。今までは建築に関係する肉体労働でした。言ってみれば汚れる仕事ですね。その人が日本人女性と付き合いようになって、「自分はこんなことをする身分ではない。もっときれいな仕事をさせろ。」と言い出してしまいます。日本というブランドを身に着けることによって、自分が偉くなった、地位も変わったと思い込む。もちろん彼が努力をして、仕事の能力を認められ、ブルーカラーからホワイトカラーへ、あるいは給料が上がるということはあり得ます。でも日本人女性とくっただけでは、そんなことはできないのです。そして日本人女性というのはそういう勘違いをさせてしまうのですね。

そして拳句の果てには子供ができてしまってどうしようというケースがありました。先に書いたように子供ができること自体に、私は文句は言いません。というかそれは自分たちの責任なので、私が何かを言う権利はありません。そしてどういう結論を取ろうと、自分たちで納得して結論を出せば、それでいいと思っています。しかし自分たちで

解決せず、仕事にも支障をきたし、回りを巻き込むだけ巻き込んで、嫌な思いだけを残し去っていく人もいたのです。

だからそんなことを繰り返したくない私としては、ボランティアをやりたい、あるいは働きたいと言ってくる人に必ず最初にくぎを刺します。過去、こういう出来事があり、私は困りました。その思いを繰り返したくないから気を付けてくださいと。それを理解したうえで根性据えて恋愛をするのであれば、私は応援します。私自身も初めてアフリカに行った時にガテラに出会い、恋愛をして…という段階を経てきたので、偉そうなことを言える立場ではないのかもしれませんが、でもやはり自分の土俵の上では、中途半端に恋愛をしてほしくないなって思うのです。



雑文もろもろ

テレビを見ていた。アフリカのどこかの国のミュージシャンのプロモーションビデオだ。歌のメロディや内容は何も覚えていない。ただししっかりと頭の中に残っているのは、そこで踊っていたお姉さんたちの肉感なお尻だ。

なぜアフリカ女性のお尻はそこだけ別の生命体のように動くのであろうか？しかもボリュームがあるので、そんなお尻をフリフリして踊られると、それだけで目が釘付けになるのである。男だけではなく、女だって女の人のお尻にくぎ付けになるのだ。

結婚式に行ってきたきれいに着飾っているお姉さんたちを見ると、羨ましくてたまらない。みんな、メリハリがあってドレスが似合うのだ。場合によっては胴回りだってボリュームがあって、見るに堪えないような体型になるかもしれないのに、相手を惹きつけるのだ。そう、多分胴回り言えば、私だって同じように太く、サイズも変わらないかもしれないのに、私はかっこ悪く、彼女たちはかっこいいのである。う～む、悔しいではないか。彼女らは若い時は若い時はつらつさがあり、子供を産んでマダムになればなったで、パワフルなのだ。

彼女たちのセックスアピールは腰から下、特に太ももにあるらしい。バストに対するセックスアピールは西洋のそれとは違うようだ。だから赤ちゃんに授乳しても、男の人はいやらしい目つきで見ないのかも。堂々と赤ちゃんにおっぱいをあげている姿を見て、彼女たちのかっこよさを持ち合わせていないことが残念でならない。だからやはり神様は不公平なのである。

【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信60号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（5～7月）

5月	円
6月	円
7月	円

このおかげで次の製品を配布することができました。

義足	23本
装具	8本
杖	42本

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【この本をぜひ読んで！】

ガテラの甥っ子が本を書きました。

甥っ子の名前はガエル・ファイユ。ルワンダの紛争を逃れ、ブルンジで生活していたガテラの妹さんがフランス人の男性と出会って、生まれた子。現在はフランスを中心にミュージシャンとして活躍をしています。

そんな彼がいつだったか「今、本を執筆中」と教えてくれました。まだまだ完成するのは先のこと…と思っていたら、なんとすでに日本語訳もされ、出版されていました。

彼の実体験をもとに書いたフィクション。ブルンジで自分が感じた人種差別や民族対立など、幼いころの記憶をたどりながら書かれています。

平和だったブルンジにだんだんと不穏な気配が忍び込み、幼いながらに居心地悪さを感じ始めたガエル。その時感じた理不尽。白と黒の間に生まれたため、アフリカにいれば白人と言われ、フランスにいれば黒人と呼ばれる。そしてささやかれ始める民族の違い。そんな自分はいったい何者なのか？葛藤する心。

彼は去年ルワンダで結婚式を挙げました。結婚式には黒い人も白い人も、そして黄色い人もいました。彼のバンドの名前は Milk Coffee & Sugar。白いミルクとコーヒーの絶妙なハーモニー。そしてそこに砂糖を入れればもっとおいしくなる。そんな思いのこもったバンド名です。

祖国ルワンダでもコンサートを行い、たくさんの若者から支持されるようになりました。そばかすだらけの、ノッポのガエル。Youtubeでも彼の動画を見ることができます。

ルワンダ・ブルンジの民族紛争について書かれた自伝的小説。この本は読んで決して損はしない、私がお約束します。ぜひ手に取って読んでみてください。



「小さな国で」"Petit Pays"
ガエル・ファイユ Gaël Faye
早川書房出版
定価：¥1,900（税別）

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆さまのご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

- * 発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。
- * 当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはありません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。
ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いております。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町 12-28-304 TEL: 080-6564-4448

info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.rw(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信61号 2017年8月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>

